

第2章

リスクを踏まえた態勢構築を 内部監査における DX導入上の留意点

有限責任監査法人トーマツ 西原 隆

思われるトピックを紹介する。
なお、本稿には筆者の私見が含まれていることをご容赦願いたい。

内部監査における デジタル活用の現在、 そして未来

近年、監査計画とりわけ監査スコープの選定段階において、子会社分析のアナリティクスツールを活用する内部監査部門が増えている。

デジタル活用は、現地への往査を行わずとも定期的にオフサイトモニタリングを行うことを目的として、一部の内部監査部門で導入が進んでいたものの、コロナ禍における渡航制限といった現在の社会状況が導入への後押しとなっているケースも増えている。

従来のオンサイトモニタリングは一定の効果があるものの、地理的制約を受け、属人化されやすく、質問書等による監査では回答のレベルにバラツキが生じるという限界があり、オフサイトモニタリングはオンサイトモニタリングを補完する役割を果たしている。

事業ごとに不正リスクシナリオを検討し、データの裏づけに基づいた

デジタル化の流れ

現在、企業活動を行ううえで、テクノロジーが担う役割が拡大の一途であり、非常に興味深い時代に突入している。高度なアナリティクス、ロボティクス・プロセス・オートメーション(RPA)、およびコグニティブ・インテリジェンス(CI)における技術の進歩とトレンドは、急速にビジネスモデルを再編成し、生産性を改善している。また、COVID-19におけるリモートワークの実現においてテクノロジーの活用は不可欠であり、現在のオペレーションのあらゆる側面においてすでに基盤となっている。

今後、革新が進む技術の導入を続

【この章のエッセンス】

- 内部監査のデジタルトランスフォーメーションの取組みに着手している企業が出始めてきている。アナリティクス、SOXテスト自動化、リスクセンシングなどデジタル化の手法は幅広く、今後も新技術の開発が見込まれる。
- デジタル活用においては、リスクの理解とビジョン(長期的なあるべき姿)の策定が肝要である。
- 今後内部監査部門が果たすべき役割はAssure、Advice、Anticipateの3つであり、ビジョンに組み込むべきである。

けるに従い、内部監査部門が担う責任においてはこれまで以上に重要度が増している。最新技術導入に伴う新たなリスクを評価し、リスクに対する見識を得なくてはならない。そうすることによって、内部監査部門は、新たに生じているリスクを回避および検知するために必要な統制機能が組織内で適切に導入されているかを評価することができるといえる。ほとんどの企業の内部監査部門は、この取組みに着手したばかりである。

本章では、デジタル化における内部監査部門のあるべき姿、果たすべき役割に焦点を当て、先進的なデジタル技術に伴う具体的なリスクの詳細を検討し、内部監査部門が有効にデジタル活用できるために役立つと